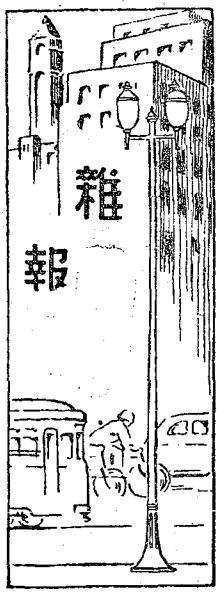
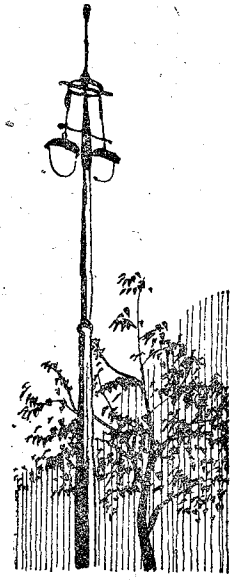


◎ 内閣交迭

阿部内閣總辭職し組閣の大命海軍大將米内光政氏に降下米内大將は直に組閣に着手し翌日午前親任式が行はれた。閣員等の顔觸れは左表の通り。



新内閣一覽表

	位階勳等爵位	氏名	年齢	經歷	出身地	出身學校
内閣總理大臣	海軍大將 正三勳一功四	米内光政	六一	前海軍大臣軍事參議官	岩手	明治三四 兵學校
外務大臣	從三勳一	有田八郎	五七	元外務大臣貴族院議員	新潟	明治四二 東大法
内務大臣	伯爵從二勳一	兒玉秀雄	六五	元拓務大臣元遞信大臣貴族院議員	山口	明治三三 東大法
大藏大臣	從三勳一	櫻内幸雄	六一	元商工大臣元農林大臣民政黨常任顧問	島根	
陸軍大臣	陸軍大將 正三勳一功五	畑俊六	六二	留任	福島	明治三四 士官學校
海軍大臣	海軍中將 從三勳一	吉田善吾	五六	留任	佐賀	明治三七 兵學校

司法大臣	從三勳二	木村尙達	六二	檢事總長	熊本 明治三九 京大法
文部大臣	從二勳一	松浦鎮次郎	六九	元文部次官元九州帝大總長 樞密顧問官	愛媛 明治三一 東大法
農林大臣	從三勳二	島田俊雄	六四	元農林大臣內閣參議政友革新派顧問	島根 明治三三 東大法
商工大臣	勳三	藤原銀次郎	七二	王子製紙會長全國產業團體聯合會々長貴族院議員	東京 明治四二 慶大
遞信大臣	正四勳二	勝正憲	六二	民政黨總務	福岡 明治三八 東大法
鐵道大臣	正五勳三	松野鶴平	五八	政友正統派常時顧問	熊本
拓務大臣	陸軍大將 正三勳一功二	小磯國昭	六一	前拓務大臣	山形 明治三四 士官學校
厚生大臣	從四勳三	吉田茂	五六	元內閣書記官長貴族院議員	大分 明治四四 東大法
內閣書記官長	正三勳二	石渡莊太郎	五〇	元大藏大臣	東京 大正五 東大法
法制局長官	正三勳二	廣瀨久忠	五二	元厚生大臣	山梨 大正三 東大法
大藏		政務次官	木村正義	政革三	熊本一 無職(五一)
		參與官	松田正一	民政四	三重一 會社重役(五七)
		政務次官	三好英之	民政五	鳥取 新聞社長(五六)
陸軍		參與官	宮崎一	政革三	埼玉一 辯護士(五五)
		政務次官	松山常次郎	政正六	和歌山一 會社重役(五七)
海軍		參與官	小山邦太郎	民政五	長野二 製糸釀造業(五二)
		政務次官	星島二郎	政正七	岡山二 辯護士(五四)
司法		參與官	高木正得	研究(貴族院)	無職(四七)

◎政務官發表

一月二十四日各省政務官の任命があつた其氏名政黨別職業等別表の如し。

省名	官名	氏名	會派	當選	選擧區	職業	年齡
外務	政務次官	小山谷藏	民政七	和歌山二	無職		(六五)
	參與官	小高長三郎	政革三	千葉三	通信社長		(五一)
	政務次官	鶴見祐輔	民政三	岩手二	著述業		「五六」
內務	參與官	青山憲三	政革五	石川二	農業		(六二)

文部
政務次官　舟橋　清賢　研究（貴族院）　無　職（五〇）
參與官　仲井間宗一　民政三　沖　縄二　辯　護　士（五〇）
政務次官　岡田喜久治　民政五　栃　木一　無　職（五二）

農林
參與官　松木　弘　政正三　新　潟二　辯　護　士（六二）
政務次官　加藤鎌五郎　政革五　愛　知一　醫　師（五八）
參與官　喜多壯一郎　民政二　石　川二　大學講師（四七）
政務次官　武知　勇記　民政四　愛　媛一　無　職（四七）
參與官　藤生安太郎　政正三　佐　賀二　無　職（四六）

商工
政務次官　宮澤　裕　政革五　廣　島三　會社重役（五七）
參與官　大島　寅吉、民政三　北海道三　會　社　員（六六）
政務次官　松岡　俊三　政正六　山　形二　新聞社員（六一）

鐵道
參與官　加藤　成之　公正（貴族員）　大學講師（四八）

逓信
政務次官　一松　定吉　民政五　大　阪一　辯　護　士（六八）
參與官　飯村　五郎　第一六　茨　城三　辯　護　士（五三）

拓務

厚生

○新内閣員等の略歴

△米内光政總理　岩手縣士族米内受政氏の長男として明治十三年三月生る。同三十四年海軍兵學校卒業、海軍少尉となり昭和十一年四月大將となる。其間春日、外數艦の艦長第二艦隊參謀長、第一遣外艦隊司令官、第三艦隊司令官、佐世保、横須賀各鎮守府司令長官、聯合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官等に歴補せられ昭和十二年二月海軍大臣となり林、近衞、平沼三代内閣を經て再ひ聯合艦隊司令長官となり、一月十五日夜組閣の大命を拜し同十六日内閣總理大臣に任せらる。

△有田八郎外相　新潟縣佐渡の出身で、政友會の長老故山本悌二郎氏の令弟、本年五十七歳、明治四十一年東大卒業領事、總領事等より駐獨大使館參事官、本省亞細亞局長を經て駐墺公使に轉出、芳澤外相の下に次官となり引續き滿洲事變下の内田外相時代、當時の白鳥情報部長とうまが合はぬ關係で退官、外交界より勇退したが、後、廣田外相の時復活して駐白大使、駐支大使となり二・二六事件直後の廣田内閣の外相に就任、日獨防共協定締結の主役をつとめた。退官後勅選議員に推され昭和十三年十月再び近衞内閣の外相となり引續き平沼内閣に留任、昨年八月同内閣總辭職と共に退官、今日に至つてゐる。

△兒玉秀雄內相　前掲載。

△櫻內幸雄藏相　島根縣出身明治十三年生れ、早稻田大學理工科卒業、濃飛日報、知多新聞等の記者を經て明治三十六年東京市街鐵道始め諸會社の創立に參畫、今、現に岡山水電、相模電力其他數會社の重役を兼ね、昭和六年第二次若槻內閣に商工大臣となり同十二月辭任、十四年二月平沼內閣の農林大臣に就任した。大正九年以來島根縣より代議士に當選七回に及び現に民政黨常任顧問として同黨の重鎭となしてゐる。

△畑俊六陸相　福島縣出身故畑英太郎大將の令弟、明治十二年生れ、第十二期の陸士砲兵科出身、明治三十四年砲兵少尉に任官、爾來獨逸駐在武官參謀本部々員、砲兵監、參謀本部第一部長、第十四師團長を經て昭和十年航空本部長となり間もなく臺灣軍司令官に轉じ次で軍事參議官となり、昭和十二年十月陸軍大將、翌十三年松井大將の後を受けて中支軍最高指揮官となり徐州戰武漢攻略戰に功を樹て同十四年五月戰線より歸還、侍從武官長として宮中に入つたが同八月阿部內閣成立と共に陸相となり其儘留任。

△吉田善吾海相　佐賀縣の出身、明治十八年生れ、明治三十七年海軍兵學校を卒業、次いで海軍大學を終へ軍令部參謀、聯合艦隊兼第一艦隊參謀長軍務局長等を歷任し昭和九年十一月海軍中將に昇進、同十一年二月練習艦隊司令官、同年十二月永野大將の後を受けて第二艦隊司令長官、同十二年十二月に聯合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官と榮轉し、同十四年八月阿部內閣の海軍大臣となり其儘留任。

△木村尙達法相　熊本縣出身明治十二年生れ、明治三十九年京都帝大卒業、同四十一年檢事に任じ岡崎區、千葉地方同區各裁判所檢事を經て獨逸に留學、伯林ヂュツブンゲン及ミュンヘン兩大學に學び大正三年歸朝、判事に任じ東京地方判事同部長、司法書記官兼參事官、大臣官房調査課長本省刑事局長より大審院檢事に轉じ昭和十一年再び判事となり大審院部長を經て同十三年七月東京控訴院長に就任昨年二月泉二新熊氏の後任として檢事總長に親任せられ今日に至つた。

△松浦鎭次郎文相　愛媛縣出身明治五年生れ、明治三十一年東大卒業、直に內務省屬となり間もなく東京府參事官となつたが文部省に入り書記官、大臣祕書官、參事官を經て明治四十五年專門學務局長、大正十二年文部次官となり翌年一月辭任まで實に二十九年間の文部省生活を續け昭和一年服部宇之吉博士辭任後の朝鮮京城大學總長に迎へられ同四年十月九州帝大總長に轉じ同十一年七月辭任まで在任滿六ケ年、九大名譽教授に擧げられた。なほ昭和五年十一月勅選議員に推され同十三年二月樞密顧問官に任ぜられ今日に至つた。

△島田俊雄農相　島根縣出身、明治十年生れ、明治三十二年東大卒業、東京市吏員となり、市政調査局長心得等に歷任し後退職して辯護士を開業、明治四十四年以來島根縣より代議士に八回當選、昭和六年十二月犬養內閣に法制局長官となり同十二年三月廣田內閣の成立と共に農林大臣として入閣、昨年一月平沼內閣の參議となつた。なほ氏は政友會の生え抜きの政黨人で現在中島派に屬する。

△藤原銀次郎商相　長野縣出身、明治二年生れ、明治二十四年慶應大學卒業、松江日報を創刊、後三井銀行を經て三井物產に轉じて臺北支店長となり、後王子製紙に迎へられ同社經營に縱橫の才腕を揮つて着々地步を占め、遂に同社々長に就任、昭和八年富士製紙、樺太工業兩社を合併し依然その社長となり同十三年取締役會長に就任、製紙界の第一人者となつたが一昨年暮製紙界を引退、私財千數百萬圓を投じて單科工業大學創設を企てゝゐる。なほ昭和四年勅選議員に推され昨夏獨逸ナチス大會の遣獨使節として出發したが今次動亂のため入獨せずに歸朝した。

△勝正憲遞相　福岡縣田川郡香春町出身、明治十二年生れ明治三十八年東大卒業後大藏省に入り稅務監督局事務官より松江、長崎、鹿兒島各稅務署長を經て函館稅關長、仙臺稅務監督局長、大藏書記官參事官、東京稅務監督局長等を歷任し同十二年財務官として米國紐育に駐在、歸朝後再び東京稅務監督局長となり同十五年退官、西久保市長の下に東京市助役となつた辭職後福岡縣より代議士に當選五回、

民政黨に屬しさきに大藏參與官、岡田內閣の商工政務次官に就任し、同內閣退却と共に辭職。

△松野鶴平鐵相　熊本縣出身、明治十六年生れ、故野田卯太郎氏の女婿、早くより實業界に入り現在再製樟腦菊池電氣軌道の社長のほか朝鮮紡績、鐘淵曹達、滿洲製麻等諸會社の重役である。なほ大正九年以來熊本縣より代議士に當選六回に及び昭和十年三月政友會の幹事長に推され其手腕を振つた。現在久原派に屬する。なほ昭和六年犬養內閣中橋內相の下に政務次官に就任したことがある。

△小磯國昭拓相　山形縣出身、明治十三年生れ、畑陸相杉山元大將等と同期で明治三十四年士官學校を卒業、昭和十二年陸軍大將に累進し、其間步兵第五十一聯隊長、參謀本部課長航空本部總務部長、本省整備局長の要職に歷補し滿洲事變では當初は軍務局長であり收拾時代には次官から關東軍參謀長に轉じ終始華々しく活躍、その功によつて功二級を賜はつた。其後第五師團長より朝鮮軍司令官に進み、昭和十三年七月豫備役に編入、世人に惜しまれたが昨年四月平沼內閣、八田拓相の商相專任の後を襲つて拓相に親任せられたが同內閣交迭と共に辭職極めて短期間の在職であつた。

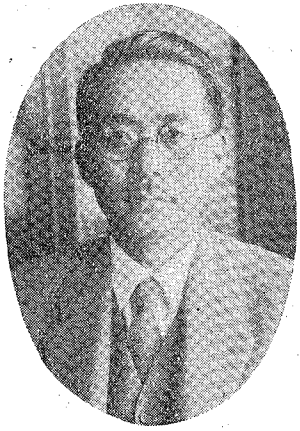
△吉田茂厚相　東京府出身、明治十八年生れ、明治四十年東大卒業後官界に入り、石川縣警部補を振り出しに三重縣理事官、內務書記官、歷任永田市長の下に東京市助役となつたが再官界に入り、復興局整地部長、內務省神社局長等を經て昭和四年社會局長官に昇進、退官後同六年協調會理事長となつて民間に乘り出したが同九年岡田內閣成立と共に書記官長に就任、翌十年內閣調査局設置と共にその長官に轉じ翌年十一月辭任、同十一年十二月貴族院議員に勅選された。現在軍事保護院參與である。

△石渡莊太郎書記官長　東京府出身、故石渡敏一法學博士の長男として明治二十四年誕生、大正五年東大卒業後直ちに大藏省に入り稅務監督局屬を振り出しに同局事務官、稅務署長、稅務監督局關稅部長、大臣祕書官、主稅局國稅課長、主稅局長に歷任し後內閣調査局調査官から吉田長官の

後を襲つて長官心得となつたが再轉して再び主稅局長となり昭和十二年近衞內閣の賀屋、池田二藏相の下に次官を勤め、昨年一月池田元藏相の推薦もあつて平沼內閣の大藏大臣に就任戰時財政に得意の腕を揮つた阿部內閣成立と共に退職し今日に至つた。

△廣瀨久忠法制局長官　山梨縣出身、明治二十二年生、大正三年東大卒業後官界に入り滋賀縣警察部長、福井縣內務部長、復興局書記官等を經て昭和四年堀切市長の下に東京市の助役となり辭職後再び內務省に歸り東京府內務部長、三重縣知事、埼玉縣知事、本省土木局長、社會局長官を歷任して昭和十二年六月馬場內相の下に次官となり一時退官したが、翌十三年厚生省設立と共に同省次官に轉じ平沼內閣の厚生大臣に任せられ阿部內閣成立と共に退官。

◎成田土木局長の略歷　本會理事山崎巖氏が警保局長に榮轉せられたので後任として石川縣知事成田一郎氏が土木局長に任せられた。成田新局長は明治二十七年十二月二十二日宮城縣仙臺市北三番丁に生れた。大正五年三月二十五日、廣島高等師範學校英語部卒業、同九年七月五日京都帝國大學法學部卒業同年同月二十六日內務屬となり都市計畫課勤務同年十一月文官高等試驗合格同十年六月二十三日埼玉縣兒玉郡長に任せらる。同十二年三月三十一日警視廳警視となり元町、北綱屋、本富士各署長歷任、同十五年五月十二日內務省社會局事務官となる。昭和四年三月三十日瑞西國「ジュネーブ」に於て開催の第十二回國際勞働總會に於ける政府代表委員顧問を命せられ歐米各國へ出張す。同五年一月十六日歸朝社會局勞働部勞務課君島課長外國出張中課長代理となる。同年十二月二十八日社會局書記官となり勞働部勞務課長を命せらる。同七年四月十五日資源局事務官仰付けら



れ同年八月十一日內務事務官兼任同十一年三月十四日內務省書記官兼內務大臣祕書官（大臣官房人事課長）を命せられ翌十二年二月一日社會局部長となり同十三年一月十日厚生省勞働局長に轉じ翌十四年四月十五日石川縣知事に任せられ、今回土木局長に轉任せらる。

○細田德壽氏　本會幹事內閣總理大臣祕書官兼興亞院總裁祕書官內務事務官細田德壽氏は一月十九日本官を免され、內務事務官に專任せらる。同二十四日富山縣書記官（警察部長）に轉任。

◎土木出張所長事務打合會

內務省に於ては一月八日午前九時より同省第一會議室に於て、昭和十五年度土木費豫算に關する件及物資配給の實狀に關して土木出張所長事務打合會を開催し、物資、勞力の供給狀況等を詳細に亙り協議を遂げ、豫算の執行に關し萬遺憾なきを期した。

◎利根運河の開鑿

房總半島を切斷して利根川と東京灣を水路で繼ぐ利根運河工事と船橋市から千葉市にかけての海岸地先の大埋立事業を決定した。內務省土木局では兩事業に關する具體的設計が出來上つたので豫算の議會通過を待つて愈々今春四月からこの二つの大工事に着手することになつたが利根運河の工事によつて掘鑿する土量はパナマ運河工事の土量よりも遙に多くまた千葉、船橋兩海岸の埋立總面積は約七百萬坪で面積において世界屈指といはれるのでまさに世界的二大事業であり完成後は東京灣に一大工業地帶が出現するだらうと當局は意氣込んでゐる。

利根運河は茨城縣取手鐵橋下から船橋市までの二十七キロに幅員百四十米乃至三百米の水路を掘り利根川と東京灣を結ぶものでその水路工事によつて掘り出される土砂を以て千葉、船橋間の海岸に埋立を行ふわけであるが水路開設によつて掘り出される土量は二千五百六十萬坪といはれるのでパナマ運河工事の土量二千三百萬坪より餘程多いといふのである。大方千葉船橋間海岸地先の埋立工事は約七百萬坪の大埋立地を築造し海岸の浚渫を行ひ立派な岸壁をつ

くり鐵道を引き込み岸壁に一萬トン級の船舶が樂に横付けされる樣にすることになつてをり理想的工業地帶を作ることになつてゐる。この運河と埋立の總工事費は約二千三百萬圓で十五ケ年繼續事業で完成する計畫になつてゐるが今年の土地買收費並に工事費は二百五十萬圓である。

◎新舊土木局長の挨拶　新土木局長成田一郎氏は一月二十四日着任せられたので翌二十五日午前十一時第二會議室に土木局總員參集新舊局長の挨拶が行はれた。先づ前局長山崎警保局長は昨年四月土木局長に任命せられ、僅々十ケ月間の極めて短期間の在職で何等土木行政に貢献し得られなかつたことを衷心から恥づる處であるが、唯重大時局に卽應する土木豫算を編成し得たるのみにて、帝國議會の審議に干與することなく局を去ることは甚だ遺憾とする處である。在職中局員一同克く御援助を與へられ特に尤も感銘を與へられたのは局風である、夫れは事務といはず、技術といはず、全局員が協力一致事業の計畫遂行に協力せられたるの一事で之は終生忘るること能はざることである。尙私は同廳内に在るから從來の通御交誼を願ふ。思へば土木局にては恰かも我家に居りたるの感があつて無遠慮に卒直に振舞つた。家族と共にあるの思ひで明朗な日々を送つたが今御別れすることの惜しまるることである。相變らず御懇情を御願ひする。後任成田局長を今更他人行儀な御紹介を致す必要もない。其人格に於て見識に於て最適任である。此重大な非常時局に於て諸君は新局長を援けて土木行政の爲めに一段の努力を致されんことを云々、との別離の情を込めた挨拶をせられた。成田新局長は此度圖らずも土木局に轉任を命ぜられ昨日着任しました。土木の仕事は何等の知識もなく、又經驗もないので一に山崎前局長の御指導局員諸君の御援助に俟つの外はない。局員の中には御親交ある方も少なくない。偏に御協力を御願ひする。元來私は無遠慮な性格でザツクバランに物を言ふたちであるから皆樣も其氣持で御願する。今山崎サンから土木局には良い局風があるとのことを承つたが、技術、事務の別なく重且大なる時局に在つて深甚なる御援助御協力を得て共に國家

の爲めに邁進することを希ふ次第である。との主旨を以て新任の挨拶をせられた。赤木第三技術課長は總局員を代表して山崎前局長閣下は御在職長期間と云ふを得ないが、實に誠意と眞情とを以て指導せられ、和氣靄々たる氣分を以て執務し得たことは全く人格の感化によるもので、今日御別れすることは愛惜の情に忍び得ないものがある。又山崎閣下が此多難なる場合に未曾有なる土木豫算の編成を貫徹せられたることは實に一大功績である。之は土木局員として忘るべからざることである。尙閣下の公人としての御働が將來多大なる果實を結ぶの期あるを待望して已まぬ。厚く感謝の意を表すると同時に、今後とても倍舊の御指導を希ふ次第である。又成田閣下には石川縣より御轉任せられたが、土木行政は勿論一般行政にも通曉せられ其知其識を以て今時の難局に際し智乏しく才足らざる私共を御指導あらんことを切願する次第であるとの意を述べて答辭とした。

◎根津評議員死去

本會評議員貴族院議員、勳二等根津嘉一郎翁は四日午前一時三十三分、赤坂區青山南町六の一一五の自宅で逝去した。

◎田村保壽氏死去

圍碁名人二十一世本因坊秀哉氏は一月十八日熱海溫泉で死去した享年六十七歳。

◎マニエンタ女史

ビルマ人元女學校長で數年前からMRAのフルタイムワカーとなり、ブツクマン博士と協力して居る。舊冬日本に滯在して居つた。そして「今我々が望んでゐる眞に強い新しい日本はどこから生れて來るか、一國の國防線はその國民の精神にあります。國民一人々々が自分の責任を取る事が大切です……眞の強い

新しい日本を生み出すか出さぬかはあなた方の撰擇に殘されてゐます、一人一人が各自の立場で責任を取るか、取らぬかに殘されてゐるのです」と吾々日本人に呼びかけて舊臘日本を去つた。

◎近刊圖書雜誌

○日本都市年鑑（第九輯昭和十五年用）

東京市政調査會で昭和六年以來毎年編纂刊行する都市統計書であるが、創刊以來其の編纂、資料の蒐集及撰擇等に最も力を盡し意を用ゐ、今や本邦唯一の文獻たるに止まらず、諸外國に於ける此種文獻に氏し遜色あるを見ざるに至つた。當局者の苦心は察するに餘ある所である。試みに總說中に記述する所を見るに內地市制の沿革、外地府制及市制の沿革、時局下の市政概觀、地方制度改革問題、東京都制問題は勿論阿部內閣の地方制度改革方針、地方稅制改正問題等に及び都市研究上缺くべからざる文獻である。本輯編纂上編者が如何に用意したるかを證する爲めに緒言の一節を拔萃する。「今や支那事變の勃發以來年を閱すること二年有半、此の間本邦都市の世界殆に東亞に於ける政治經濟、文化上の地位は一層重加せられたと共に、他面直接事變に因り都市乃至市民生活の上に齎らされた影響は蓋し尠少ではない。今回版が斯る實情を明かにすることに特に意を用ひ各篇を通じ此の點に注意を集中するは勿論滿洲國、支那及外國都市篇を更に擴充して本邦都市と隣邦乃至歐米主要都市との氏較研究に便し、且は夫自體に於て一層利用價値あらしめるに努めたことは特に利用者の注意を請ひたき所である」と之れ決して自畫自讚の言にあらず、一讀すれば思ひ半ばに過ぐるものがある。（H生）

◎土木工學論文抄錄（第二輯　土木學會）

土木學會では曩に創立二十周年を記念する爲明治、大正昭和に渉り土木工學に關する文獻を收錄し頒布したが、今回創立二十五周年を迎へて其第二輯として刊行したるものである。其收錄する所は土木一般、應用力學、水利、測量材料、コンクリート、施工、熔接、河川、水力發電、斷堤上水道、下水道、港灣、道路、都市計畫、橋梁の構造物、

鐵道、隧道等凡そ土木工學に關する全般的文献である。斯道に關係ある者として坐右に缺くべからざるは敢て言を俟ない所である。（T生）

○**自警**（一月號）

○**斯民**（第三五卷一號）

（小林千秋＝氏昭和十五年度道府縣豫算の展望。杉山俊朗氏＝紀元二千六百年祝典實施豫定要項に就て）

○**水利と土木**（第一三卷一號）

（谷口技監＝治水の重要性に就きて）

○**技術評論**（第一七卷一號）

（峰岸長生氏＝日本戰時經濟の新段階）

○**紀元二千六百年**（一月號）（神社號）

○**警察協會雜誌**（一月號）

○**乘合自動車**（一四、一二號、一五、一月號）

○**汎交通**（第四〇卷一二號）

○**清和**（第六卷一二號）

○**鐵道軌道經營資料**（第二二卷二號）

（暮谷惣太郎氏＝ブエノス・アイレス市の交通統制）

○**大阪商工會議所月報**（第三九一號、第三九二號）

（伊太利に於ける物價統制）

○**土木學會誌**（第二五卷一二號）（創立廿五年周年紀念號）

○**土木工業**（第一卷一二號）（細川龜市氏＝歐洲戰亂と日本經濟）

○**法律時報**（第一二卷一號）

（高柳眞三氏＝日本法制二千六百年史）

○**觀光聯盟情報**（第三卷一二號）

○**土木建築工事畫報**（第一六卷一號）（赤木正雄氏外二五氏＝日本は今如何なる土木を必要と致すべきや）

○**道路**（新年特輯號、第二卷第一號）

○**電氣通信學會雜誌**（第二〇號）

○**都市問題**（第三〇卷一號）（市制府縣制改正策批判特輯）

○**駿工**（第一五卷一二號）

○**コンクリート講習會講演集**（第九集）

（日本ポルトランドセメント同業會）